

読書の秋、食欲の秋 その4

読書の秋です。

図書館に行くと、どこの図書館でも、その図書館の醸し出す特有の雰囲気
が魅力的です。図書を選択の仕方と並べ方とコーナーコーナーに彩があり、
その一つ一つをかみしめていると時間がいくらあっても足りません。

子どもが小さい頃は、内郷の市立図書館によく行きました。かいけつゾロ
リのシリーズや精霊の守り人シリーズなどを一人10冊ずつ借りることができ
たので、子どもたちを連れてその本の選択や手続き等など、とてもお世話に
なったのを覚えています。

一家で福島に転勤してからは、県立図書館に歩いて5分ほどで行ける場所
に住居を構えたので、県立図書館の子ども図書館によく行きました。日曜の
朝に9:30分になると子供たちとともに図書館に行つて本を眺め、お昼近く
まで過ごすのが習慣となりました。

県立図書館には、様々な樹木が植えられていて、周囲を散歩しても興味深
い様々な樹木を眺めることができ、とても印象深いものでした。背後の信
夫山という小高い山をぐるりと道路が走っていて、湯殿山神社から月山神社、
薬師堂と薬王寺、羽黒神社と三つの峰を一回り歩くと優に半日かかるくらい
の距離をよく歩いたものでした。

土曜日には、飯坂街道を飯坂まで約10キロランニングをして、公共浴場で
風呂につかり、帰りは飯坂電車で帰るのも一つの楽しみでした。

読書に話を戻すと、その土地で見つけた思い出深い本というのがあります。
今年になって、磐高図書館で見つけた酒井英行著「宮本輝論」は出色の作家
論です。宮本輝という作家の前半期の小説を一筋貫いている「命そのものの
認識」と「素朴に生きる民衆を信頼する姿勢」が書かれていて、私はその論
理の組み合わせに心から引き付けられました。

宮本輝には、川三部作（「泥の河」「蚩川」「道頓堀川」）があり、中でも「泥
の河」は映画にもなっている作品ですが、「宿命を自分の内的必然と感じ、そ
れと闘わしめる哲学」がその根底には流れていると指摘しています。

秋の夜長に、虫の声を聴きながら、こんな一節を読んでいることのできる
喜びがそこにはありました。

私の夢は、図書館を作ることです。実家の周りの田畑を埋め立てて、図書
館を作りたいと思います。秋田の国際教養大学にある中島記念図書館のよう
な図書館が作れるとよいなと一人夢見ています。

